

障害児保育における保育効果の研究 (I)

鈴木裕子*・金平文二*・後藤嘉余子*

芝辻益子**・上野己美子**

(平成3年9月30日受理)

A Study of the Effect of Care on the Nursing of Handicapped Children (I)

Yuko SUZUKI, Bunji KANEHIRA, Kayoko GOTO, Masuko SHIBATHUJI and Kimiko UENO

(Received September 30, 1991)

はじめに

子どもの養育に不安を抱く母親の多いことは今日的な現象といえるが、発達上に何らかの問題をもつ子どもの場合には母親の不安や戸惑いは一層増強されるものと思われる。それでも問題が身体的な側面に限られているときは比較的早期に発見され、医学的な所見に基づく療育が開始されるものの、言葉の遅れや対人行動面などの問題については一般に初期の段階における気づきは少なく、発見が困難で対処の時期も遅くなる傾向が見受けられる。従って発達の遅れが明確となった時点での母親は焦燥感に駆られ、精神的安定を失ってしまうことが多い。このような子どもの保育にあたっては母親の状態を考慮し、子どもの発達を助長するよう働きかけると同時に母親に対しても養育の援助が必要となろう。それには保育の場への参加をとうして子どもの現在の状態をありのままに把握するよう促しながら、本質的な問題の理解を求め、適切な援助行動の確立にむけて手助けすることが重要である。

こうした考えに基づいてわかくさグループでは従来より母子同室制をとり、子ども、母親、保育者の相互的な関わりの中で保育をすすめてきた。まず母親へのアプローチに際しての基本的姿勢としては、子どもが発達しつづける存在であり、人との触れ合いの中で二者関係を確立させ、更にその基に集団の一員として主体的・能動的活動を志向するといった子ども観の形成をはかるよう働きかける必要がある¹⁾と考える。また入室初期の段階の母親は的確な問題把握は困難で、子どものありのままの姿を受容できるまでには時間を要するが、問題の理解が

なされると多少の不安や戸惑を残しながらも“子どもにとって”という子どもの立場に立った視点がとれるようになり、援助行動も徐々に適切なものになっていく²⁾ことが期待できる。ともすると発達上の問題をもつ子どもの母親は不安や戸惑い等からその関わりに消極的、否定的態度がみられ、養育上悪循環を招きやすい。しかし、保育者の助言や具体的な子どもへの接し方に関するモデル呈示によって、子どもとの好ましい関係のとり方を体得できるようになる³⁾ことも明らかである。

入室初期においては保育者・子ども・母親といった三者の関係づけが保育効果をあげる上で大きなウェイトを占め、この時期の関わり方がその後の指導効果を左右するといっても過言ではなからう。また、子どもへの側面的な援助は子どもとその家族を受けとめ、個別理解を深めることに発する。そして援助者の価値観が母親に理解され、受け入れられて共感関係が形成される程にならなければ障害児へのアプローチは子どもの発達に容易に連動しがたい⁴⁾ともいわれる。保育者と子どもと母親の間がこのような状態に関係づけられることによって初めて効果的な保育の展開をみることが出来よう。入室時は子どもも母親も共に新しい場所や人に対して緊張感が強く不安を抱いている。保育者はこの点に注意を払い保育集団に慣れるように配慮しながら、母親と子ども双方の行動を観察し、問題の本質を見極め、援助の方向を探ることが重要な課題となる。

これらの点を踏まえて母親がありのままの子どもを受容しようとする時期でもある入室初期の重要性に鑑み、この時期における保育者の援助行動および役割について何らかの示唆を得ることを目的に、言葉の遅れを訴える2ケースを取り上げ、主訴に着目しながらも問題の本質

* 児童学科・保育科 ** 児童学科わかくさグループ

を探り、併せて保育者の関わり方や援助行動の望ましいあり方について事例を通して検討する。

方 法

東京家政大学附属障害児保育施設（通称：わかくさグループ）に1990年10月入室のY.W（1歳11カ月、女児）と、同年12月に入室したU.O（2歳1カ月、男児）の二組の母子を対象とした。

入室時より1カ月に亘り保育中の行動をVTRで録画した。録画は毎回登園より昼食時まで凡そ1時間の活動について、隣室のコントロールユニットを介し2台のカメラで撮影した。1台は対象児に焦点を当て表情、動き等を網羅し、他の1台では保育室全体の様子を録画した。後日、ビデオテープをもとに子どもの行動と母親の動きを中心に転写し、活動の流れや内容も併せて記録した。また、保育中の行動特徴について整理したもの、入室の際医師並びに相談員が行う個別面接資料、発達検査（遠城寺式・乳幼児分析的発達検査）の結果、成長・発達の記録、成育環境等に関する個人記録（母親記載）、更には入室時からの保育記録（保育者記載）を考察の際に資料として用いた。

事例の概要

事例Ⅰ W.Y（1歳11カ月・女児）

主訴： 言葉の遅れ

家族構成： 父、母、兄（5歳）

入室までの状況：

頸定－3カ月（やや不安定であった）

始歩－1歳9カ月、1歳4カ月より歩行訓練を開始する。1歳11カ月に3m歩く。現在まで移動はほとんど這行で行う。

言葉－発語は1歳6カ月、現在は一語文で「タタ（父）」「デンキ」「コンニチワ」「アッタ」程度である。鸚返し発語はよくみられる。理解語は発語より多く、言われたとうりに行動することはできる。歌の真似をする、声はよく出している。

対人行動－現在まで人見知りはみられない。自分から人に関わりをもつことはないが、人から働きかけられると応じる。最近よく笑うようになり、表情も豊かになってきている。

その他－乳児期はあまり泣かずおとなしかった。5カ月頃、物に手を伸ばさないことから受診し、検査の結果

“小眼球症”（左眼）が判明した。その後検査と手術の為に入院を繰り返す。入院後は目にみえて表情が乏しくなり、反応も少なくなった。家庭に戻っても一人で指を吸いながら眠ってしまうことが多かった。視力は右眼に頼ることになったが、母親はこの子なりに見える世界で生活して行けると考えあまり気にかけず、特別な配慮はしてこなかった。

入室時の遠城寺式発達検査結果はDQ69であった（図1）。とりわけ運動と言語の発達はかなり遅れている。また、生活習慣にも遅れがみられるが、これは生活経験の不足が影響しているように思われる。反面、対人関係は年齢相応であるため、今後の関わり方次第で言語面、運動面ともかなりの発達が期待できよう。

運動面－這行で手押し車の所まで行き車につかまって立ち上がる。少しの間車を押して歩いているが手を離して膝立ちで周りをウロウロ歩いている。這行でおもちゃの置いてある所まで移動し、坐り込んで手を伸ばし人形を取り出して遊び始める。

母の立っているスベリ台の所まで歩いていく（2～3m）母が後で介助しスベリ台の階段を一段ずつ手をつきながら足を揃えて昇る。

遊び－A子が傍に来るとA子のすることをじっとみている。A子が持っていたシャベルを箱に投げ入れると、シャベルを目で追いつ箱の中から取り出して見ている。しばらくして箱の中に戻す。

隣にいるB男のすることを見ている。B男がピンを振ると（音がする）それに合わせるように自分の身体を揺らす。B男がピンを振るたびにそれを繰り返している。

皆で一緒に手遊びを始めるとそれに合わせて自分も身体を動かしたり、手を動かしたりして参加する。

出席をとる場面では、名前を呼ばれると母親に促されて自分で手を上げる。皆が拍手をしてくれると自分も同じように手をたたいている。他児が名前を呼ばれている時は椅子に腰かけて周りの様子をよくみている。

人との関わり－保育者が隣に坐りW.Yの身体に触れて「Y子の探していたものはあれ？」とW.Yを母親の正面に向けて母親の手の中のビーズを指さすと、保育者に関心は示さないが、指されたものを見つめる。

W.Yが積木をいじっている所に保育者が来て入り、「ワー」と言いながらW.Yの方に積木を押し出すとW.Yも「アー」と声を出しながら保育者に積木を押し返してくる。何度か繰り返してやりとりをしている。

障害児保育における保育効果について

遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表 (九大小児科改訂版)

氏名	W. Y	男 女	外来番号	検査年月日	1. 7年/月8日	3. 年 月 日
					2. 年 月 日	4. 年 月 日
生年月日	63年11月4日生	診 断	DQ 67			
4: 8	スニッパができる	鉄線網を自分で破る	ひとりで見直ができる	群衆で一人以上で協力して一つの山を作る	文章の理解 (2/3)	左右がわかる
4: 4	プランコに立ちのりしてこぐ	はずみボールをつかむ	回号を見て正しく道路をわたる	ジャンケンで勝負をきめる	四角形の理解 (2/3)	数の概念がわかる (5まで)
4: 0	片足で散歩とぶ	紙を前後にそって切る	人指し。ある行状自分で体を流す	母親にことわって友達の家に遊びに行く	両腕の伸長、住所をい	状況はる物の指し(5/5)
3: 8	輪とび(輪足をそろえて解にとぶ)	十字をかき	鼻をかむ	友達と順番にものを使う(プランコなど)	文章の理解 (2/3)	数の概念がわかる (3まで)
3: 4	でんぐりやえしをする	ボタンをはめる	顔をひとりで見よう	「こうしていい」とお母さん	同母の年齢と自分の年齢	高い、低いがわかる
3: 0	片足で2-3歩立つ	はさみを使って紙を切る	上唇を自分で吸く	ままごとで寝るほしめる	二語の理解 (2/3)	米、小、黄、緑がわかる (4/4)
2: 9	みたまでくぐるとまわる	まわて○をかき	腕をひとりではく	年下の子供の世話をやきたが	二語の理解 (2/3)	高い、低いがわかる
2: 6	足先を出して階段をあげる	まわて右腕を引く	こぼさないでひとりではく	友達とけんかをするとはいいつける	自分の指をさす	大きい、小さいがわかる
2: 3	両足でジャンプする	鉄線網に両手ではかか	ひとりではく	電話ごっこをする	「はいはいはいはい」などの声を出す	前、見、足、へそ、尻を指さる (4/4)
2: 0	ボールを蹴にける	水を器に二つ以上なら	指をさす	二語を話す (わん、おんなど)	「もうひょう」「もうすこし」がわかる	
1: 9	ひとり一段ごとに足をそろえて階段をあげる	鉛筆でぐるぐるまをかく	ストローで飲む	鉛筆を握ってつづもの	鉛筆を握ってつづもの	目、口、鼻、手、足、指を指さる (4/4)
1: 6	走る	コップからコップへ水をうつす	パンツをはかせるとき	両腕を二つに分けてお	両腕を二つに分けてお	鉛筆を握ってつづもの
1: 4	紙をはいて書く	水を二つに分ける	自分の口をひとりではく	簡単な声を出す	3語を話す	簡単な声を出す
1: 2	2-3歩あるく	コップの口の端をとり出す	おまのつづものをとって飲む	はめられると同じ動作をくり返す	2語を話す	簡単な声を出す
1: 0	座った位置から立ちあがる	なぐりおとしをする	さして直ようとする	又やりの後述をする	ことばを2語、3語、4語を話す	簡単な声を出す
0: 11	ついで歩をする	おもちゃの車を走らせる	紙を自分で持って飲む	人見知りをする	自分のまわりのこと	簡単な声を出す
0: 10	つかうさあがる	びんのおたを、あけたしめたりする	はかずに足を踏む	おまをまわす	さかにおしやべり	簡単な声を出す
0: 9	ものにつかまって立つ	おもちゃのたいこをたたく	コップなどを両手で持つ	おもちゃをとりかた	タ、チ、チなどの音を出す	簡単な声を出す
0: 8	ひとりではく	両腕と人さし指でつかうとする	顔をふくよとするといい	顔を見たり聞いたり	ツ、パ、パなどの音を出す	簡単な声を出す
0: 7	顔はいて体をまわす	おもちゃを一方の手からもう一方に動かす	コップから飲む	顔しめたり顔を動かす	おもちゃなどに向って	簡単な声を出す
0: 6	足をよりをする	手を出してものをつか	ビスケットなどを自分で食べる	顔に吸った自分の顔に反応する	人に向って声を出す	簡単な声を出す
0: 5	横向きに寝かせると寝がえりする	ガラガラを振る	おもちゃを見る動きが活発になる	人を見たと笑いかけ	キューキューという	簡単な声を出す
0: 4	音がする	おもちゃをつかんでいる	さじかきぬことがで	あやされるのをしる	声を出して言う	簡単な声を出す
0: 3	あおむけにして体を動かす	横にふれたものを動かす	顔にふれかけられて不快を示す	人の顔をさす方に向	泣き出す	簡単な声を出す
0: 2	顔はいて顔を動かす	手をにげてういてしゃべる	両腕にのりて顔を動かす	人の顔をさす方に向	泣き出す	簡単な声を出す
0: 1	あおむけでときどき左右に顔を動かす	手にふれたものを動かす	両腕にのりて顔を動かす	泣き出す	泣き出す	簡単な声を出す
0: 0	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発 語	言語理解
(注: 月)	移動運動	運動	社会性	言語	言語	言語

図1 W. Yの発達検査結果

母親以外の人には身体に触れられると身をかわすことが多かったが、同室児の母親がW. Yの正面に向き合って手を差し出すと手をつなぐ、保育者の言葉をかけても声のする方を一歳するだけであったが、人の声に注目するようにじっと相手を見つめるようになる。

母親の接し方-母親がチューリングをひとつずつはめてW. Yの目の高さに持ち上げて声をかけると、遊んでいる手を止めて自分のチューリングを持ち上げ母にそれをみせながら声を出している。

母がW. Yの手にピンを持たせピンの中の玉を取り出してみせ、再びピンの中に玉を戻し振る、W. Yは母親

のすることをじっとみていたが、今度は自分でピンを振ってみる。そしてピンの中から玉をつまみ出し、それを戻すと母親の方をみながらまた振る、母親はほほえみながらW. Yのすることをみている。

考 察

本ケースは言葉の遅れと合わせて運動発達の遅れが認められるケースである。小眼球症というハンディキャップを持っているため入退院を繰り返してきたことが遅れを昂じさせたとも言えよう。歩行の不安定さは歩行訓練の成果により徐々に克服されてきている。長距離の移動

は這行が多かったり膝立ちであることが未だみられるものの、目標に向かって歩く場面も多少みられ、歩こうとする気持が育っていることがうかがえる。独り歩きへの移行期とも言えるのではないだろうか、必要な時には介助を惜しまず、安定した歩行の確立にむけて援助することが大切であろう。自由に行動できるようになるに従い興味や好奇心は自ずと周辺に向かい、ものや人に対しても関心を示すようになる、遊びにも自分から取り組み目的をもって行動するようになり、まずは模倣をとうして活動を楽しんでいるといった様子が見えてくる。母親はこれまで「この子なりに」という捉え方で可視範囲を踏まえた配慮は少なかったようであるが、保育者のアドバイスを聞き入れ子どもの見やすい位置にものを呈示したり、音など他の感覚からの刺激を合わせて取り入れるなどの工夫が出来るようになってきている。

しかし、人との関わりはまだ十分に開放されていない点は留意する必要がある。ただし指差しや声かけには本児なりに応じる姿勢が認められ、今後に期待できる。

現在は母親を核にして徐々に身近な人を受け入れ、関わるの範囲や交流を広げて行きつつある段階といえよう。

また言葉がコミュニケーションの手段としての役割を少しずつ獲得してきていることが、伝達のための発声・呼びかけなどに現われている。無理をさせずその時の状況を把握しながら、本児の視界を常に確認してやりとりの楽しさを十分に体得させ、自発的な活動へと導いていくことが大切であろう。

成長・発達之最も旺盛な時期にベッドの上での生活を余儀なくされ、行動の制限や、刺激の乏しさなどが、諸々の発達の遅れを生じさせたと言えよう。加えて母親の障害に対する認識の不足も遅れを助長していたものと推察される。今後の関わり方や経験を豊かにして行くことが大切であり、W・Yの単眼という特徴を理解し、生活上の配慮をしていくことが発達を促すためには不可欠であるといえよう。その具体的な方法等を母親が体得出来るよう援助する必要があると思われる。

事例Ⅱ U・D(2歳1カ月・男児)

主訴： 言葉の遅れ

家族構成： 父、母

入室までの状況：

顎定-4カ月

始歩-1歳1カ月

言葉-発語は1歳1カ月、父の帰宅時に父親の顔をみて「バア」と言った。それ以後言葉らしき発語はない。言われた指示にも応じることは少ないが、「ちょうだい」というと持っているものを手渡す時もある、言葉を教えても反応はない。

対人行動-10カ月頃に母親の後追いをしたが今はみられない。自分から人に関わりを求めることはしない。同年齢の子どもと一緒にいても殆んど交流せず、働きかけられても応じない。むしろ避けている。

その他-乳児期はおとなしかった。3カ月頃には首の出るものを示すと笑ったり、抱きあげると喜んだりしていた。現在は一人で絵本を見たり、ミニカーで遊んでいることが多い。公園など人の大勢集まっている所に連れていくと目的もなく走り回っていることが多い。禁止などは相手の顔色をみて一瞬理解できるようであるがすぐに同じことを繰り返してしまう。自分の要求は母親の手を引いて目的の場所に連れていき、「ソーソー」と要求を伝える。新しい場や人に慣れるのに時間がかかる。母親は今この子にどのように関わって行ったら良いのかわからず戸惑っている。

入室時の遠城寺式発達検査結果はDQ40であった(図2)。全体に遅れが大きく、言語面においては殊に著しい。対人関係のとりにくさが発達の他の側面にも影響し、阻害しているものと思われる。

保育室での様子：

行動-保育室の中をキョロキョロしながら動き回っている。遊具棚の前で立ち止まり遊具に触れるがすぐに手を引きまたウロウロ歩き回る。部屋の隅にいる母親の所に行き手をつなぐと一緒に歩き回る。トランポリンにC男が乗っているのをしばらく見ているがその場で地団駄を踏み始める(要求が通らない時に現われる行動であることからU・Oはトランポリンに乗りたかったと思われる)母親は気づかず他の所に移動する。U・Oはバンバンと手でトランポリンを叩き母の方をじっと見ている。保育者が「乗ろうか」と誘いかけるがU・Oは保育者の方をチラッとみてその場から走っていく。キョロキョロしながら部屋の中を動き回り、母親をみつけると傍に行き手をつなぐ。

ドアの取手を触り、撫で回す(よく現われる行動で、母親と手をつなぐことで満たされない状況や母親が自分の思い通りに行動しない時などに見られる)

出席をとる場面では、椅子に腰かけたり降りたりして

遠城寺式・乳幼児分析の発達検査表 (九大小児科改訂版)

図2 U、Oの発達検査結果

D男がU・Oの傍に近づいてくると「びくっ」として

U. Oはそれをまた取り母に手渡す、すると母親は今度はそれを床の上に置く、U. Oはそれをみてウロウロし

始め、落ちていたブロックを拾い床に投げつけドアの所に行く。

坐って遊んでいるU・Oの隣に母が坐り遊具の使い方を説明し始める。U・Oは聞き入れず、今までどうりの自分のやり方で遊び続ける。

母がU・Oに遊具を渡そうとするが受け取らない。自分で遊具を取り出しに行き、持ってきて畳の上に置く、(保育室内の畳コーナー)母が来て隣に坐るとチラッと母の方をみる。持っていた遊具の1つを母に手渡すとドアの所に行き、ノブをさわって弄んでいる。

考 察

本ケースは言葉の遅れと行動上の問題を合わせもつケースと言えよう。入室前の様子からは人との心地良い交流の体験の少なさがうかがわれ、それが保育室における行動にも反映されているものと思われる。緊張感や不安感の強い様子が目的もなく室内を動き回ったり、必ずと言ってよいほど母親の姿を確認し、探して手をつなぐ行動に現われているといえよう。また人の多い所を避けたり、見慣れない人に対する恐怖心もみられ、閉鎖的で落ち着きのないU・Oの状態が一層助長されているようである。

母親は集団内で唯一の頼れる存在であることは否定できないが、その母親もU・Oの理解者とは言い難く、U・Oの思いと母親の行動にはずれが認められ円滑な関係が構築されていないと推察できる。それがU・Oを一層不安定にし、心を開ききれないもどかしさとなりドアのノブを弄ぶ行動につながるのではないだろうか、今必要なことは母親がU・Oの気持ちに添った行動をとり、理解者としての存在を確立することであろう。すぐに手をつないでいたり、母親が傍にいても安心できない不安定さなどの意味を母親自身が理解し、受け止めて行けるように母親を援助する必要があると思われる。

新しい場や人に対する抵抗感や不安感の強いU・Oに対し、環境に慣れ安心して活動できるようにすることを第一義に考え、環境の調整をはかり居心地の良い状態を保つ努力が望まれる。そのためにまず母親に問題の本質理解を促し、それにそった行動化をはかることが先決である。U・O自身への直接的な働きかけは次の段階の課題となろう。母親との関係の再構築を保育の場や人への慣れを優先しながら適宜対応していくことがより良い援助になるものと思われる。

以上2つの事例はいずれも「言葉の遅れ」を主訴とするケースであるが、その背景は異なることが理解される。言葉の遅れは発達上の問題として顕在し他児と比較されやすいため、しばしばそれが問題にされることが多い。しかしながらこれらの事例が示すように言葉の遅れは問題の一つの側面である場合が殆どである。従って主訴のみに固着せず子どもの全体像を捉えて問題を把握していく努力が必要であろう。本質的な問題は何かを見極める洞察力が要求される。

入室初期は環境の変化に伴う母親と子どもの戸惑いや緊張感を考慮し、どのように活動を展開しているかに留意しながら発達上の歪みや滞りの原因を探らなければならない。また、子ども本来の伸びようとする力を方向づけることが大切である。方向を志向するにあたっては母親との関係調整や不十分な問題認識の修正がまず必要とされる。母親への助言による気づきを促すことと合わせて保育者自らが行動しモデルとしての役割も果たすべきであろう。

おわりに

わかくさグループでは、発足以来一貫して母子同室の保育を行ってきた。発達上の問題をもつ子どもの保育にあたっては、対象児の療育が中心となることはいうまでもないが、なかなか順調に成長・発達を遂げない障害のある子どもを生んでしまったというリスクを背負っている母親への援助もまた不可欠であるといえよう。母親と子どもを共に援助して行く必要性を痛感する次第である入室初期には特に母子同室の意義が強調され、子どもは母親との分離不安を抱くこともなく、日常生活の延長として保育に参加し、母親を介して徐々に人との関わりを拡げて行く一方、母親も保育者との接触を通して不安を軽減し、子どもへの関わり方を次第に体得すると共に、安定した状態で子どもに接することが出来るようになって行く。このような母子の変化が本事例からも推察できる。母親は子どもの問題に気づきにくく、また一方では遅れを認めたくないといった心情的な拒否感、そのうちに追いつくであろう、どうにかなるだろうといった期待感、または問題からの逃避など、様々な屈折した気持をもっている。これらのことは面接場面や母親の行動から容易にうかがえる。しかし、これらも具体的な保育活動場面への参加が増えることで少しずつ改善され、保育

者や他の母親との関係の成立に従い母親自身が開放されてゆき、自ら子どもの理解を深め子どもの問題の正しい理解と適切な援助が出来るようになって行くことが期待できる。以上の点を考えると、入室初期の段階では保育者が子どもと母親を共に抱え込み、自立への援助をはかり、個々の発達のペースなど諸々の特徴を踏まえながら保育場面での援助を行って行く必要性を痛感させられる。母親は環境にも慣れ、安心して活動できる場が保障されると意欲的に保育への参加を果すようになって子どもにも変化が現われてくることや、子どもの成長が多少なりとも理解された時に母親の変容がみられるといった経過は本事例でも読みとれる。関わるものと関わられるものとの関係の発展がその後の発達を助長していくことは明白であり子どもと最も身近に接する母親の変容こそが家族を含めた養育の中心におかれることは歪めないであろう。

いずれにしても子どもの変化の兆しを母親が察知し、また気づかない母親には気づきを促し、更に子どもの行動の意味するところを読みとる力を養い、子どもの心に添った対応が出来るように援助して行くことが肝要である。子どもの行動や心の動きを感知し、子どもの心に添った行動をとると同時に、母親の心情を汲んで養育に対する母親の姿勢を再構築すべく援助を怠らないことが大切である。子どもと母親のそれぞれの変化を的確に察知し、母親の行動の成果をフィードバックして行くことで

母親も自覚して行動できるようになり、それが子どもとの関係を好ましい方向へ導くことにもなる。入室初期は今後の指導の糸口を見出す時期として、更には次段階への方向づけを確定するうえで大切であるといえる。

ことばの遅れという同じ主訴をもつ子どもの事例について考察をすすめてきたが、同一の問題として捉えられていてもその背景はケースによって異なるものである。初期には母親・子ども両者の行動からそれぞれの特徴を把握し、柔軟にケースに応じて様々に関係調整をはかって行く援助の大切さが示唆されよう。

今後は継続的に事例を観察する中で、保育効果を十二分に発揮できるよう検討を重ねて行きたい。

引用文献

- 1) 村上英治：重症心身障害児 保育研究増刊号 P. 101-102, 相川書房 1985
- 2) 村井則子・村井憲男・仁平義明・足立智昭・村上由則：障害をもつ母親の異常の認知と育児態度，日本教育心理学会第28回大会論文集 P. 1042-1043, 1986
- 3) 芝辻益子・上野己美子・金平文二・巷野悟郎・後藤嘉余子・鈴木裕子：障害児保育における保育効果について(I) P. 476-477, 日本保育学会第41回大会発表論文集 1988
- 4) 小関康之：障害児と遊びⅣ 保育研究増刊号 P. 139 相川書房 1985